

日加国交

50年の変遷

日本とカナダ両国間に外交関係が樹立されてから、今年で五十周年になる。大学の歴史学教授であったヒュー・キンリーサイド氏が駐日カナダ大使館を開館したのは、一九二九年五月二十日のことであった。同じ年に、徳川家正氏が駐カナダ日本代表としてオタワに赴任し、ハーバート・マラー氏が駐日カナダ公使として東京に赴任した。

正式な外交関係が樹立される以前から日加両国は友好的な接触があるにはあったが、それは断続的なものであった。政府間の業務は、原則として、東京のイギリス代表部を通じて行なわれていた。二国間で直接行なわれた協定の最初ものは、おそらく一八八九年にカナダ側郵政大臣と日本側通信大臣との間で結ばれた郵便為替協定であろう。同じ年、通商問題、移民問題などの必要性から、日本政府はバンクーバーに領事館を設置した。また一八九七年には、最初のカナダ政府商務官が日本へ派遣されている。

第一次世界大戦によって両国関係の正常な発展は一時中断されたが、一九二〇年代初期には国際貿易と外交活動の飛躍的な拡大を見た。カナダは無限の天然資源を有する国であり、当然のことながら日本にとってはかなり関心をひく存在であった。一九二六年の英帝国会議で、自治領諸国が諸外国と直接外交関係を結ぶ権利が初めて認められた。カナダ政府は直ちに、カナダにとって最も重要な外国の首都に大使館を設置する方針を実行に移した。一九二七年にワシントン、一九二八年にパリ、そして一九二九年に東京にそれぞれカナダ大使館が開設された。

キンリーサイド博士



また日本からカナダ西岸へ

なぜこの時期に日本に代表部を設置したか、五十年たった今では見当がつかないかもしれない。しかし、当時すでに、

の移民問題は新たな協定を必要としており、そのためには両国間に直接的接触が是非とも必要だという事情があった。さらに、カナダの当時の中国専門家が、もっと近くから中国を観察するためにも、東京に外交代表部をおくことが必要だった。英国を仲介としない、純粋な二国間関係を結ぶ機が熟したとの判断から、カナダ政府は一九二八年、日本と外交代表を交換する方針であると発表した。その一年後に、自由党内閣の前関係であったサー・ハーバート・マラー氏がカナダで最初の全権公使に任命された。思えば初代駐日カナダ公使の手から信任状を受けられたのが今の天皇陛下であられたというのも、日加両国の関係がもつユニークな特徴であろう。

当時の対日輸出品はほとんどが、太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州で産出される原材料であった。カナダの輸出業者は、日本市場を一種不思議な尊敬の念をもって眺めていた。日本がカナダの小麦や材木、水産物、鉱物を無限に受け入れてくれる容器か何かのように考えていたのだ。こうした過大な期待が満たされることは決してなかったけれども、日本は確かに小麦粉、家具、紙・パルプ、